

混沌とした中から

マインドマップ (1)

マインドマップを知っていますか。

マインドマップは、イギリス人のトニー・ブザン氏によって提唱された図解表現技法のひとつです。1970年代に始まったもので、「記憶」、「発想」、「連想」の中にある「考え」や「アイデア」を構造化して明確にできる技法と考えられています。文章で表現するのではなく、中心的テーマやアイデアなどをツリーを応用して記録、表記していく筆記法ということも言えるものです。表現方法としては、概念の中心となるキーワードをイメージとして図の中央に置き、そこから放射状にキーワードやイメージをつなげていくことによって発想を伸ばしていく方法です。この方法によって複雑な概念もコンパクトに表現でき、非常に早く理解できるとされています。というのも人間の脳の構造に良く適合しているため理解や記憶がしやすいといわれています。

マインドマップは頭の中のものを図解することを基本にしています。これは、原始人たちの洞窟絵画、古代象形文字やレオナルド・ダ・ビンチなどを始めとする偉人たちのスケッチに見られるように人間は言葉として表現する前に頭の中で「絵」で描き表現してきました。「絵」で表現することが人間として最も自然で効果的な表現方法であり記憶法だとする考えが元になっています。

もう少しマインドマップの考え方の基本になっている部分を説明すると、脳の機能にまでさかのぼります。まず、脳の機能がどれだけ使われているかですが、古くは50%で井戸といわれていたものが90年代後半には3%程度しか使われていないことがわかってきました。もちろん使われていない97%は、もし何かあった場合のためとなっている部分もあるでしょうが可能性を秘めている部分と考えられないことはありません。そこでこの現在あまり使われていない部分を使おうとするのが脳の活性化です。次に脳の右脳と左脳とは使われ方が違うという考え方があります。つり、一般的に右脳はリズム、空間認識、概観、イメージーション、夢想、色彩、多次元性等のいわゆる「芸術的な活動」を行う部分で、それに対し左脳は言葉、論理、数値、順序、直線性、分析、リストなどいわゆる「学術的な活動」を行っているといわれています。その間にあるのが「脳梁」で右脳と左脳を繋ぐ役割をしていると考えられています。そういえば「右脳を鍛える」といった本が良くありますが、右脳だけを鍛えることはできないことで、鍛えるのであれば脳全体を鍛え活性化するということを考えたり、能力で未開発の部分を中心に伸ばすといった考え方が正解と考えられます。マインドマップはこの右脳と左脳の両方を使って全能のバランスを取る働きを持っていると考え、脳梁の機能を滑らかで早くすることによって右脳と左脳の機能を最大限に働かせることのできる方法としています。例えば、何かをまとめようとする場合、そのインプット作業では内容からイメージしたものは「右脳」に働きかけ、キーワードや構造を考えていくことは論理的な「左脳」に働きかけるものとしています。つまり、マインドマップは右脳と左脳それぞれの2つの活動をスムーズに運ぶことを前提にしたツールであり、脳梁を活性化することによって人間の持っている能力を最大限に活用することができるツールとしています。また、マインドマップを使ってアウトプットをする作業では、マインドマップを描くことでさまざまなアイデアやヒントを連想していきます。言葉で連想することもあれば、映像やイメージで連想することもあり、右脳と左脳がそれぞれ中心に働いたり、時には両方が一度に連想することもあると考えています。(次回へ続く)

(今週の情報誌から)

○日経パソコン 6月9日号

特集 Webページの不思議

→時として思わぬ動きをするWebページ。「戻る」で戻れなかったり、クリックしなくても自動で開いたり、いきなりアニメーションが動き出したりなど、いまどきのWebページはどうなっているのか。ちょっとセキュリティ面で不安になったりするが、仕組みがわかれば納得できる。

特集 デジタルファイリング

→あらゆる書類をスキャナで読んでファイリングしようという特集。ドキュメントスキャナで読み込んでデジタル化して活用する流れを紹介。